

四肢麻痺を呈し頸部椎間板ヘルニアと診断された犬の 術後リハビリテーションの一例

○小倉美咲¹⁾ 上野博史²⁾ 田村悠²⁾ 樺下早絵³⁾

1) 酪農学園大学大学院獣医学研究科獣医保健看護学専攻

2) 酪農学園大学獣医学類伴侶動物医療、3) 酪農学園大学獣医保健看護学類動物物理学療法学

【目的】椎間板ヘルニアは動物の神経疾患の中で最も多く認められ、重度の場合、運動機能の回復には減圧手術と術後のリハビリテーション（以下、リハビリ）の実施が必要である。今回、四肢麻痺を呈し頸部椎間板ヘルニアと診断された柴犬に対して物理療法と車椅子を取り入れた術後リハビリを実施し、自力での起立・歩行が可能となった症例について報告する。

【材料・方法】症例は柴犬、12歳8ヶ月齢、去勢雄、体重9.16kgであった。H28年2月26日の昼から運動失調が認められ、夕方に自力起立および歩行が不可能となったためHDを受診した。頸部脊髓疾患が疑われ、プレドニゾロンが処方されてわずかに良化したが、その後、改善が認められず、同年3月2日、酪農学園大学附属動物病院を受診した。初診時の検査では四肢における痙性麻痺、姿勢反応の消失および脊髓反射の亢進が認められた。CT検査において第12-13胸椎間に椎間板腔の虚脱およびガス像が認められ、椎間板脊椎炎と診断した。また、第2-3頸椎間に50%ほど腹側から脊髓を圧迫する椎間板ヘルニアが認められた。椎間板脊椎炎に対しては抗生物質による内科的治療が選択された。頸部椎間板ヘルニアに対しては、翌日にベントラルスロット術が実施されたが、圧迫物質は完全には除去できなかった。術後1日目から1日2回のリハビリを開始し、マッサージ、患部へのアイスパック（術後3日目まで）、屈伸運動、自転車漕ぎ運動、引っ込め反射の誘発、ピーナッツボールを使用した起立訓練を実施した。本症例の性格は非常に温厚で、リハビリに協力的であった。術後3日目において症状の改善が認められず、頸部に対するレーザー治療を、さらに術後6日目に超音波治療を追加した。その後、徐々に回復傾向を示し、術後10日目から車椅子を用いた起立・歩行訓練を追加した。術後12日目に退院し、その際ピーナッツボールおよび車椅子をレンタルして自宅でのリハビリを継続した。また、頸部へのレーザー照射を週1回の頻度で継続した。さらに回復の状態に合わせて、座り立ち運動、坂道歩行および階段の昇降を追加した。院内でのリハビリの実施および飼い主への自宅でのリハビリ方法の説明等は獣医師の指導・立ち会いのもと、動物看護師が実施した。

【結果】手術により除去できなかった逸脱物質の退縮を目的として頸部へのレーザーおよび超音波治療を開始した。以降、起き上がろうとする行動が増え、さらに補助起立の程度、四肢の痙性麻痺も改善した。自力起立の頻度が増加したタイミングで車椅子を使用した起立訓練を追加したが、自力では体勢のバランスを完全にとることができなかったため、ハーネスを補助として同時に使用した。飼い主の報告では、自宅での起立訓練はピーナッツボールよりも車椅子を使用する方が容易であり、毎日実施可能とのことであった。四肢の随意運動の改善とともに車椅子を使用した歩行が可能となった。術後26日目の再診時において自力歩行が可能になったとのことから車椅子の使用を中止し、他のエクササイズを追加してリハビリメニューを強化した。術後36日目の再診では、ほぼ正常な日常活動が可能となったため、通院によるリハビリを終了した。

【考察】本症例の回復において、脊髓領域に対する物理療法の直接的な効果について判断することは難しい。しかしながら、症例は施術中においてリラックスしており、レーザーおよび超音波による温熱効果は血行促進や筋緊張の緩和をもたらし、症例に対し良い影響を与えたものと思われる。また四肢麻痺に対するリハビリにおいて、車椅子の使用は歩行機能の改善に加えて、飼い主が実施するリハビリの負担軽減となった。そのため、継続的かつ効果的なりハビリが可能となった。動物のリハビリにおいて、実施者が動物の様子をよく観察し、また、飼い主から多くの情報を得ることは、安全かつ効果的でストレスの無いリハビリプログラムの作成のために重要であると考えられた。